# 「未来」へ向けた準備

# 宇津木妙子

（元日本代表監督）

昨年11月の日本女子リーグ決勝トーナメント後（横浜スタジアム）に、子どもたちを対象とした日本協会主催の「ASOBALL」の体験・ＰＲイベントに講師として参加（写真＝佐藤博之）

**PROFILE**

うつぎ・たえこ／1953年４月６日、埼玉県出身。星野女子高（現星野高）を経てユニチカ垂井に所属し、74年に世界選手権出場。85年に現役引退後、ジュニア日本代表コーチを経て日立高崎の監督に就任。97年に日本代表監督に就任し2000年シドニー五輪で銀メダル、04年アテネ五輪で銅メダル。05年にＩＳＦ（国際ソフトボール連盟）の殿堂入り。10年に東京国際大総監督に就任。11年にNPO法人ソフトボール・ドリームを設立。14年に世界野球ソフトボール連盟の理事、15年からビックカメラ高崎シニアアドバイザーを務め、後進の選手、指導者育成や競技普及に尽力している。

このたびの新型コロナウイルス感染症でお亡くなりになられた方々にお悔やみを申し上げるとともに、罹患（りかん）された方々に心よりお見舞い申し上げます。また、医療の最先端で新型コロナウイルス感染症に対応されている医療従事者の皆さんには感謝の言葉しかありません。中には、感染した人や医療従事者、その家族への偏見や差別があると聞きます。医療従事者に対して「仕事だから当たり前でしょう」ということは間違っていますし、感染した人への心ない言葉も、許されることではありません。どんな状況でも助け合うことができるというのが、日本人の良さ。今こそ、みんなが一つになって、そういった人たちをどうやって守るかが大事なことだと思います。そして、自分自身がうつされないように、自己管理することも大切です。

今年は東京五輪が開催されるということで、ワクワクしながら新年を迎えました。どんなチームができるのだろう。金メダルを獲るためには徹底的に守り抜くようなチームをつくってほしいな。私の中ではいろいろな期待を持って迎えた２０２０年でした。しかし、新型コロナウイルスが中国・武漢で発生し、世界中で猛威を振るっています。これまでに行ったことがある海外の地域でも医療体制が整っていないところもありますし、海外の友人のことも心配です。ＷＢＳＣ（世界野球ソフトボール連盟）の仲間とは会議の

# 皆で助け合って、しのぎ合って、同じ方向に向かってボールを追う最高のスポーツです

**新型コロナウイルスの感染拡大を受けた大会の相次ぐ中止を、かつての名将はどのように受け止めているのだろうか。「現場主義」を貫いたソフトボールへの揺るぎない情熱。選手、関係者が進むべき新たな道を提言してもらった。**

取材・構成／高橋昌江　写真／BBM、JMPA

ときに「大丈夫？」と確認しています。

## 知識を広める読書の重要性

新型コロナウイルスが日本に入ってきた当初は、02年11月から03年7月に流行ったSARS（重症急性呼吸器症候群）を思い出しましたね。当時、代表監督をしていましたが、04年のアテネ五輪を前に組んでいた海外での合宿が全部、中止となりましたから。ただ、SARSは特定の国で広まりましたが、新型コロナウイルスは世界中に拡大し、日々、感染者も死者も増えている。そういう点では大きな不安を感じました。

そして、日を追うごとに先が見えない状況となり、学校が休校となったり、各種大会が中止になったりしていきました。本当に、どうなるのだろうという不安を抱きながらも、私はただ家にいるのではなく、「やれることをやろう」と思いながら過ごしてきました。ソフトボール人生56年目。ほとんど毎日のように動いてきましたから、家にいても変わらない規則正しい生活を意識し、健康維持と体力強化に努めながら、1日も早く鎮まることを祈っている状況です。

午前中は2時間ほどエアロバイクを漕いだ後、腹筋や背筋などの体幹トレーニング、タオルを使ったシャドーピッチングや素振りをし、午後は散歩をするなど、現役選手と同じように動いています。私が今、やれること。それは、準備なんです。何の準備かといえば、以前のようにソフトボール教室ができるようになったとき、すぐに動けるように。いざ、できるようになっても一緒に走れなかったり、選手にノックができなかったりということがないようにするためです。

それでも、時間がありますから、読書もしています。これまでに読んだソフトボールの本やリーダー学のような本を引っ張り出してきたり、新しい本を読んだりしています。今年、2月にお亡くなりになったプロ野球の名将・野村克也監督の著書を読むと、私も大切にしてきたことですが、「結局、最後は人なのだな」と再確認しました。

すでにいると思いますが、ソフトボールをプレーする選手の皆さんにもぜひ、本を読んでほしいですね。ソフトボールに限らず、ジャンルは何でもOKです。未来、これからのためにいろいろな知識を広めてほしいですから。

小学生は中学生に、中学生は高校生に、高校生は社会人・大学生になったときに「人としてどうなのか」と考える機会にしてもらえるといいのかなと思います。さまざまな作品を読むことで、知識が増えることはもちろん、自分はどうなんだろうと考えることで「自分探し」のようなことができて面白いのではないでしょうか。

『ソフトボール・マガジン』の7月号も読みました。特集は「みんなのグラブ大全」ということで、多くのトップ選手のグラブが掲載されていたり、恵美（松岡、豊田自動織機ソフトボールアンバサダー）の記事があったり、「PLAY BACK 1996アトランタ五輪」では守備の乱れから五輪出場権を逃したカナダ・セントジョンズでの「第8回世界女子選手権」のことも書いてありました。こうしたことから、「やっぱり、日本のソフトボールの原点は守りなんだな」とあらためて確認をしました。

▼中学でソフトボールに打ち込むようになり、星野女子高を経て、ユニチカ垂井（岐阜）で14年プレー。引退後は日立高崎で監督としても多くの実績を残した

身体を動かしながらも、そういった時間を通して、自分とソフトボール界の未来に向けて考えることが多くなりましたね。

## 感無量で涙が出た最高のステージ

ソフトボールは個人競技ではなく、団体競技、チームスポーツです。これまでの日本のソフトボール界は、監督の指示の中で動くことが多かったのではないでしょうか。それが、新型コロナウイルスにより、チームでの練習ができなくなり、各自が自分でやらないといけなくなりました。

チームで行う練習では仲間がいて、ライバル心を持ちながら取り組むことができます。みんなと合わせた練習ができるのは日本の、そしてチームスポーツの良い点です。しかし、チームでの練習ができないときは、周囲の目がありません。孤独感がある中で、自覚を高められるか。妥協せずにできるか。自分を強化できるか。そして、自分の長所をどう伸ばすか。指導者からの助言も大切ですが、自分で勉強する機会だと思います。

▲2000年のシドニー五輪では銀メダル、04年のアテネ五輪（写真）では銅メダルへと導いた。功績が認められ、05年には当時のＩＳＦ（国際ソフトボール連盟）における殿堂入りを遂げている

新しい生活様式が求められる以上、私たちも新しいソフトボールのやり方を考えなければいけません。連携プレーや試合が少なくても、基本がしっかりできていれば、チームで集まったときにできるはずです。チームで練習するときに最も大切なのは声の掛け合い。あいさつで「おはよう！」と言われたら「おはよう！」と返すように、例えば、守備で捕球した選手にしっかりと「ファースト！」とか「セカンド！」などと送球する場所を声掛けする。そういう当たり前のことが当たり前にできるように準備をしておくことでチームで集まったときに力を発揮できると思うのです。

今年は56年ぶりとなる東京五輪が開催予定でしたが、3月24日に1年の延期が決まりました。2月くらいからの経過を見ていると、難しいだろうなと感じていましたが、いざ正式に決まるとショックでしたよね。でも、今年は海外から選手たちを迎えることは難しいでしょうし、それぞれの準備もできていないでしょう。これは誰のせいでもないので、来年の東京五輪をなんとか成功させようと前向きに切り替えるしかありません。

五輪はさまざまな歴史をたどってきました。１９４０年に開催予定だった東京五輪は日中戦争の勃発などにより、その2年前に実施を返上。ヘルシンキに移りましたが、第二次世界大戦により、中止になっています。ソフトボールの正式採用は96年のアトランタ五輪からです。ソフトボールが五輪競技になる。それは、私にとって夢でした。私が現役選手のときは五輪競技ではなかったので、五輪はあこがれ。「なんで、ソフトボールは五輪に出られないのだろう」と何度も思ったものです。そして、自分が出られなくても、未来の子どもたちには五輪という大舞台を目指してほしい、とも。

五輪競技へ動きが始まったのは私が指導者の道を歩み始めたころです。コーチとして参加したアトランタ五輪の開会式は感無量で涙が出ました。全世界からこんなにアスリートが集まって、すごい舞台だなぁ、と。その後、監督としてシドニー五輪、アテネ五輪を経験させていただきましたが、やっぱり、五輪は最高の舞台だと感じましたね。勝つことによって、日本中が歓喜して応援してくれる。そういう姿を見ると、自分たちだけで戦っているのではない。全国民が応援してくれているのだなというのがよく分かります。

日本が金メダルを獲得した２００８年の北京五輪後のロンドン五輪（12年）、リオデジャネイロ五輪（16年）は正式種目から外れ、今回の東京五輪では、追加種目となっています。24年のパリ五輪では正式種目になっておらず、それ以降は未定となっています。夢の五輪が採用されたり、除外されたりを繰り返すと、正直、「何なの？」と思う自分もいます。正直、つらいですよ。でも、ソフトボールはみんなで助け合って、しのぎ合って、同じ方向に向かってボールを追う最高のスポーツです。

## 人との距離を離しても周りには多くの人がいる

今回の東京五輪は史上初の延期となりましたが、代表候補の選手たちもニュースは毎日のように見ているので、しっかりと受け止めているようです。上野（由岐子、ビックカメラ高崎）とは直接的な延期の話をしなくても、前向きに考えている様子だったので「あぁ、これは大丈夫だな」と感じましたね。山田（恵里、日立）のテレビでのコメントを見ても、来年への覚悟や責任感の強さを感じました。経験者として、しんどいときにどう戦うか。そういうことはあの二人がよく分かっていると思います。

とはいえ、若い選手も楽しみです。山田も初めての五輪だったアテネで、髙山（樹里、元豊田自動織機）もアトランタで、すぐに結果を出している。そういう選手もいるのです。若い選手が上野や山田を追い越そうという気持ちでやり、二人は「まだまだ私たちはできる！」と、刺激していってほしい。最近は「良い子」が多いように感じます。ワガママはダメですが、自己主張は必要。昔は裏表のない選手たちがケンカすることもありましたが（笑）、それでも、試合になると目的は同じですから一つになるのです。ワガママは指導者がしっかりと指導し、互いに言いたいことを言い合える、そして、一つのボールをみんなでつなぐ。そういうチームをつくってほしいですね。

（宇津木）麗華監督にとっては、他国の分析や戦略を練る時間になるのではないでしょうか。1年延期のデメリットはあまり考えたくないので、「チーム強化ができる」と考えたほうがいいと思うのです。また、どこの国の選手もそうかもしれませんが、この機会にあらためてソフトボールができる喜びや多くの支え、環境への感謝も強まるでしょう。奮起してほしいですね。

子どもたち、学生たちの大会も中止や延期となり、小学6年生、中学3年生、高校3年生といった最終学年の選手たちにとっては、練習の成果を出す舞台がなくなってしまいました。あるはずだった大会がなくなるという経験はありませんが、五輪のソフトボール競技が北京五輪で一度、打ち切られたときはすごく虚しさを感じました。全国大会は難しくても、地域ごとなどで練習の成果を披露する舞台は考えないといけないのではないかと思います。

また、これまでのようにソフトボールを通じて、いろいろなところに行きたいですね。先生と連絡を取って、部活に顔を出してみたい。全員にノックもしてあげたいですね。ノックは私との勝負。ゲームの要素を取り入れて、1時間、どれくらい耐えられるか！

そんな日を思い描きながら、私も毎日、運動を続けています。

そして、最後に伝えたいことは、「一人じゃないよ」ということです。新型コロナウイルスは人との距離を離しますが、あなたの周りには家族、友だち、先生や監督・コーチ……多くの人がいるんだよ、ということを忘れないでほしいですね。

**「一つのボールをみんなでつなぐ。そういうチームをつくってほしい」**

▲ソフトボールへの情熱が衰えることはない。今後も選手、指導者の育成に加え、競技普及に尽力していく構えだ（写真＝佐藤博之）